

おばけの季節【拷問篇】

陽羅 義光

【ひとつめこぞう】や、
【ろくろっくび】や、
【のっぺらぼう】といった、いかにも暗い夜道で遭いそうなおばけがいるなら、音そのもの響きそのもの震えそのものといった、正体不明のおばけがいます。
そういうおばけがいる以上、風習や風聞や因習などといったものも実体が見えない以上、それらのなかにもおばけがいるのではないか。

それがずっとおもっていたことで、そこで因習という言葉にひっかかり、それならもしかして、むかしの刑罰や行事などのなかにもおばけがいるのではないか。

その例のひとつとして、今回は「拷問」を取り上げたい。

ごぞんじのとおり「拷問」とは、人が人に対して行うものであり、そこにおばけのつけこむ余地はなさそうですが、その人と人のはざまにおばけがいるのではないか。

そうおもっていたので、そのおもいに解決を与える意味でも、金ちゃんと懐爺にまたまた登場してもらいます。

さてどんなことになるのか、もしかして金ちゃんが、(いつもの詰問がこうじて) 懐爺を拷問したりして。

ではおたのしみに。

禿光山人 拝

*

*

「かいじい、へんたいとは、なんじゃ」

ぼくはききました。

「金ちゃん、変なことをききますねえ」

懐爺はわかっているくせに、わからないふりをしました。

それで、いいたくないこともいわなければならない。

「わしの、じょうきゅうせいが、わしのこと、へんたい、いうんじゃ」

「金ちゃんの変なこどもですが、変態ではありませんよ。おばけずきが変態なら、わたしだって変態爺です」

懐爺に慰められて、ぼくは懐爺を抱きしめたく、いえ、懐爺に抱きしめられたいになりました。

「かいじい、おばけにも、へんたいは、おるんかのう」

「おばけだって、人間好きがいますからねえ。おばけの世界で、変態といわれているかもしれません。でも、ほんとうの変態ではありません」

「だば、ほんとうのへんたいのおばけとは、なんじゃ」

「ひとことでいうと、拷問ですね」

懐爺はためらわずにいいました。

「ごうもんかい。ごうもんはおばけかい。ごうもんはにんげんがやることじゃろ」

ぼくは疑問をぶつけました。

「たしかにそうで、おばけの世界に拷問なんてものがあるのかも分かりませんが、ごうもんそのものに、変態的なおばけくさいものが隠れている気がするのです」

「りくつはいいから、れいをだせや」

ぼくはまだ疑問におもっていたので、生意気な口をききました。

「拷問にもいろいろですが、基本は〈責め〉と〈潰し〉と〈打ち〉ですかね」

「ううむ、いたそうじゃのう、つらそうじゃのう」

「〈責め〉には、

【みずぜめ】

【ひぜめ】

【いしぜめ】

【どろぜめ】

【くそぜめ】などがあり、

〈潰し〉には、

【めつぶし】

【ゆびつぶし】

【ひざつぶし】

【ずがいこつぶし】

【きんたまつぶし】などがあり、

〈打ち〉には、

【むちうち】

【ぼううち】

【つえうち】

【はえたたきうち】

【ほうきうち】

【はたきうち】などがあります」

「ううむ、いたいのう、くるしいのう。いくつかやられたことがあるのう。せんせいやおかんに」

「そういうとき、先生やお母さんは、変態のおばけになっているのです」

なんとなく解る気がする。

「いちばんゆうめいな、ごうもんおばけは、なんじゃろな」

「それは、

【またさき】につきますね。片足ずつ牛にひっぱらせたりするんです。これをやるぞと脅かすと、だれでも白状してしまいます」

「やってないことでも、はくじょうするんか」

「白状してしまいます。人間には想像力がありますから、自分の股が裂けるのかとおもっただけで、顔も頭のなかも、蒼白になります」

「ほかに、めずらしいへんたいおばけはいるんかのう」

「それは、

【はなそぎ】ですね。これは鼻を殺ぐのです。それと、

【らせつ】ですかね。羅切というのは、ちんちんを切るというものです」

「まいったのう。けんど、それらあ、ごうもんでのうて、けいぼつじゃろ」

「刑罰と拷問はたしかに一部共通点がありますね。いずれにしろ変態おばけは、おばけの風上にもおけない卑劣で残酷なおばけですから、いずれは消える運命にあります」

「へんたいおばけがきえたら、そらあ、ほんもののおばけになるってことじゃないのかのう」

「金ちゃん、理屈っぽいこといいますねえ。わたしがいいまちがえました。消えてほしい対象であるってことですかね」

「ごうもんおばけは、きえるんかのう」

「肉体的な拷問は消えても、精神的な拷問はどうでしょうか」

「いみがわからんのう」

「つまりその、金ちゃんがわたしを問いつめる、それは精神的なごうもんおばけ、というわけです」

「それは、けしからんのう」

といいつつ、ぼくは逃げだしました。
結局、ぼくは、変態おばけなのでした。

翌日も、ごうもんおばけについて話をききました。
「あつてはならぬ、ごうもんおばけとは、なんじゃろのう」
「ごうもんおばけは、ぜんぶあつてはならぬものです」
「それでものう、いかにもやりそうなやつが、やっとなるじゃろ。そうではないもんは、あるんかのう」

しつこくききました。
「それは、高野山（こうやさん）の僧侶がやったといわれる、
【いしこづめ】でしょうか」
「ぼうさんが、ごうもんおばけ、やるんかのう」
「やったそうですね。穴を掘ってそこに人を入れて、大小の石でつめつめにしてしまうことで、結局殺してしまいましたねえ」
「ぼうさんでも、ころすんかのう」
「僧侶というものは、いつも忍耐の連続ですからね。はじけるとこわい。神経過敏症の織田信長が、石山本願寺（いしやまほんがんじ）の僧侶を皆殺しにしたのは、こわかったからでしょう」

「ぼうさんは、ごうもんおばけに、やられるんかのう」
「僧侶に対する拷問や刑罰は、一般の人よりも、はるかに厳しかったといわれています。この場合、僧侶が僧侶に対してやる人が多いんですが、女犯（によぼん）の場合で、寺社奉行から申し渡されたという例が記録に残っています」
「なにを、もうしわたされたんじゃ」

「それは、
【さらし】といって、犯した罪を書いた看板の横に、縛られたまま晒し置かれるということですね。それと、

【いぬばらい】というのもあります。これは、僧侶を裸にして、首に縄をつけて口に魚をくわえさせ、四つん這いにさせて縄をひっぱり、本堂の周りを三周まわらせてから、追放するというものです」

懐爺はなぜか、生き生きとした調子で話しました。
たぶん、ぼうさんに恨みでもあるのでしょう。
「ぼうさんたあ、なまぐさいもんじゃのう」
「煩惱（ぼんのう）いっばいだから、ぼうさんになるんです」
「ぼんのうたあ、なんじゃ」

「うまくいえませんが、悪いこととしりつつ、それでも悪いことをやりたくてしかたない、情念のことでしょうかね」

「だば、わしなんか、ぼんのうのごんげじゃ」

「それなら、金ちゃんは、僧侶になるべきですね」

「ほんじゃ、いまから、ぼうさんになるぞい」

と嘘をいいながら、逃げ出しました。

次の日も、ごうもんおばけについて話をききました。

「かいじいのすきな、ごうもんおばけを、おしえてくれや」

「ごうもんおばけに、好きなものなんかありませんよ」

「うそこけ。あるって、かおしてるぞい」

「まあ、

【ちっきよ】というやつは、部屋で大人しく本でも読んでいればいいものだから、好きなほうですかね」

「だば、いちばんきれいなもんは、なんじゃ」

「それは、この村でも、むかし行われていた、拷問で、刑罰でもありますが、

【のこぎりびき】というものです。まず、穴に埋めた人の、首だけ外に出します。罪状を書いた看板を立てます。そのそばに、竹の鋸を置いておきます。看板を読んで、けしからんとおもった者は、その竹鋸でその首を切ります。ただし、切るの一回だけですし、竹鋸ですから、あまり切れずに、まだ死にません。次の者がまた切って、その次の者がまた切って、そのうち、首が、ひとおもいにやってくれと叫びますが、ひともしにやってしまったら、やってしまった人が、こんどは罪人になって、穴に埋められます。それでも十人ほどが切ったら、出血多量で死にます。十人も切る者がいないときは、五人ほどが切ったその切り口に、いろんな爬虫類（はちゅうるい）がよってたかって、血を啜り上げ、失血死させてしまいます」

懐爺はなぜか、生き生きとした調子で話しました。

「とても、いちばんきれいという、かおじゃないのう」

「わたしは生まれつき、こういう顔です」

「まことに、

【のこぎりびき】が、にあう、かおかもしれんのう」

「昔は、よくいわれたものです」

懐爺がとてもいやな顔をしたので、ぼくは逃げ出しました。

* *

数少ない、よって貴重な、読者の質問に、唐突にお答えします。
その質問は、
「どうして、おぼけ、なのですか」

ただの「おぼけずき」だから、ということだけではありません。
それだけで三百も五百も、おぼけを登場させることはできません。

小説を半世紀以上も書いていると、どうしても、おぼけにたどりつきます。
小説も一応は芸術ですから、「真・善・美」を書くものです、書くべきもので
す、たぶん。

けれども、書くべき「真・善・美」がどこにもない、世界にも社会にも人間
にも、すくなくとも作者の心身に、としたら、どうしましょう。

ならば、大好きな逆転の発想で、「虚・悪・醜」です。

「虚・悪・醜」は、次元としては、「真・善・美」とおなじ。

それならこれがいい、書くべきものがここにある、というわけです。

ご納得、いただけましたでしょうか。

禿光山人 拝